

沖繩の民間宗教の研究

田路 慧

要 旨

現代、世界各地において民族や宗教による対立抗争は激化の一途をたどり、わが国でも心の荒廃が蔓延して宗教犯罪が頻発し、また青少年の凶悪な犯罪が増加して人々は不安と焦燥に駆られている。このような時代われわれの心に抛り所を与え、安らぎをもたらすものはやはり宗教ではなからうか。しかし既存の宗教にはもはや対応する力は無い。そこで既成の宗教、教祖・宗祖の宗教ではない普遍的・根源的な宗教、狂信や妄執、排撃抗争を生みださない全人類に共通な抛り所となり希望となりうる宗教は何か、探求することにした。数々の宗教的文獻を探索したが、納得しうる答えはなかった。佛教やキリスト教、国家神道の影響が少なく、今なお人々の間に伝統的な宗教が息づいている沖縄と、道教や仏教伝来以前の縄文時代の遺跡調査を行い考察することにした。以下その結果を基に論究する。

キーワード 祖霊神、御嶽、グスク、神アシヤギ、ニライ・カナイ

序 論

北イラクのシャニダールにある洞窟で六万年前の地層の中から体を曲げて埋葬されたネアンデルタール人の遺骨が発見された。そしてその胸のあたりの土からアザミなど八種類の花粉が発見された。すなわち花束を捧げて埋葬されていたと思われる。このことは死の意味が理

解され、死を悲しみ死者を悼むという、また人間の死体を単なる物体以上のものとみる、心の働きの顕われではないかとみなされた。埋葬し花束を捧げる儀礼は死や靈魂といった抽象的・象徴的なものが認知されていたことを示しているのではないかと考えられ、ここに人間の心の発現、人間性の起源があるとみなされている(NEH取材班「脳と心―心が生まれた惑星」日本放送出版協会)。

このように死の意味を理解し、死を悲しみ死者を悼み、人間を物を超えた靈的存在として扱う(それは同時に死への不安と恐怖、死者への畏怖の感受でもある)葬送儀礼に宗教の原点があるとすれば、人間と文化の始源は宗教とともにあったということができよう。また人間の特徴が抽象化によるシンボルの操作にあるとすれば、死の理解と靈魂の把握はまさに人間性の始点であったということができよう。

ところで、あらためて宗教とは何か、と問うてみれば多種多様な解釈があり、明確な一つの定義には収まりがたいが、本論では最も一般的な定義と思われる『広辞苑』(第五版)に従い、

「宗教とは神または何らかの超越的絶対者あるいは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事。また、それらの連関的体系」

という了解の下に考察を進めたい。もともと宗教の英語 religion の語源はラテン語の religio で、神と人間を再び結びつける、すなわち人間に

自己の生命の根源でありその生と死を支配するものを再認識・自覚させるという意味である。宗教の宗という漢字の「宀」は祖先の霊の住む家・廟(おたまや)を表し、「示」は祖霊を祀る祭卓、すなはち神位を表しており、合わせて祖先を祭るところ・祖先・おおもと・はじめ・むね・宗教を意味するようになった(白川静著『字統』平凡社・山田勝美著『漢字の語源』角川小辞典)。要するに宗教とは、自己の生命の根源とその生と死・運命を支配するものへの畏敬と憑依と信仰を意味するものであるということができよう。

宗教の本質が「再び結びつける」というところにあるとすれば、人間を結びつける対象によつて二種類の宗教が考えられよう。一つは人間を超絶した絶対者であり、他は人間と連続した祖先や天地自然といった生命活動の根源を為すものである。そして両者を結びつける働きをするものとしてわれわれ人間の中にあり、しかも人間を超えた超能力的なもの・神靈・精霊・靈魂を想定し、人間はその靈魂を感じ・想像する能力・靈性をもっていると考えざるを得ない。もつともこんな理屈をこねなくとも近代以前の人々は神や靈魂の存在を無条件に信じていたのではなからうか。

現代日本には宗教に対する無関心・無視・偏見、さらには蔑視がはびこっているようにみられる。戦前の国家神道の強圧に対する嫌悪感に加え、既成宗教の墮落、特に仏教の葬式・法事・観光偏重への反感、新興宗教の信仰強制、カルト教団による詐欺やテロなどの犯罪の続発等によつて、人々の宗教への警戒感や偏見がますます強くなってきているようである。しかも学校教育から宗教はほぼ完全に抹殺され、家庭においても核家族化の進展と共に神棚や仏壇は消滅し、さらに宗教を知らず無関心な親たちの増加によつて子どもたちはますます宗教から遠ざかっている状態である。初詣や七五三も盆や彼岸の墓参りも厄除けも単なる生活の習慣と化しただけでなく神社やお寺の商売の手段となつてしまった。お守りも今では一種のファッションである。キリスト教においても教会は結婚式場と化し、クリスマスもバレンタイン

デーも単なる行事や商売の手段となつてしまった。読売新聞の意識調査(二〇〇一年二月二十八日付)によれば、宗教を信じていない人は七七・三%であり、「国内での宗教教団によるトラブルは今後増えると思うか」という問いに対しては、四一・三%の人が「増える」と答え、宗教に対する不信感を示している。しかし神や仏が「存在する」と思う人は三九・九%もいることは、日本人の複雑な心情を表しているということができよう。

このことは特定の人物や勢力が一つの宗教を絶対化して人々に強制し、また人々が熱狂的に妄信あるいは狂信するよりは、遙かに健全な状況であるともいえるかもしれない。とはいえ人間は何かを信じていないと不安で落ち着かない存在のようである。神の代わりに金銭や財物、学歴や地位、国家や会社や党派、イデオロギーやカリスマ、科学技術や進歩など、何かを絶対化して常に信じ憑依しないと落ち着かない。われわれ人間は何らかの精神的な拠り所なしには生きてはいけなもののようである。しかし一切の權威あると思われていたものが崩壊しつつある現代、自己の心・精神以外のものによりどころを求めることはもはや不可能となつた。かくて人々は心の空白、虚無感と根源的な不安に苛まれることとなつたのである。このような時代ややはり人々の心の空白を満たし安らぎを与えるものは本来の宗教以外にはないと思われる。

現代我が国の若者達の心は宗教的空白状態にあるということができ、われわれの大学生への意識調査によれば靈魂や異界など宗教的なものへの関心は結構高い(「死に関する現代学生の意識構造の研究」岡山県立大学研究紀要第四卷一九九七)。一般に現代の青少年はオカルト的なものへの興味は非常に強いといわれている。このことはオウム真理教に多数の真面目な高学歴の若者達が加入信仰したことをみても理解できる。現代の若者達は宗教的無免疫状態にあるということができるのである。また現代の若者達の虚無的衝動的な非行・犯罪や薬物中毒、化粧やブランドものへの執着をみても、その言動の根底には

何のためにという問いを喪失した深い虚無感が伺われるようである。

「宗教なき教育は、ただ利口なる悪魔を作る」とウエリントンに言
い、「宗教がなければ教養の調和なく、したがって人生の尊い意義が
失われる。宗教は内から発して来なければならぬ」とシユライエルマ
ツハーは言い、「宗教は人間陶冶の根本である」とペスタロッチも言
っている。また綱島梁川は「倫理は外より宗教に加えられるものには
あらず。倫理てふ花は寧ろ宗教的信仰の根底より有機的の一体として自
ら咲出すべき筈のものなり」と言い、西田幾多郎も「学問道德の本に
は宗教がなければならぬ。学問道德の極致は、宗教に入らねばならぬ」
と言い、さらに「世には往々何故に宗教が必要であるかなどと問う人
がある。それは何故に生きる必要があるかという同一である。宗教
は生命そのものの要求である。かかる問いを発するは自己の生涯に真
面目でない証拠である。真摯に考え真摯に生きんと欲する者は必ず熱
烈なる宗教的欲求を感じずにはいられない」と述べている。トルスト
イは「神はそれなくしては生きてゆくことのできないものだ。神を知
ることと生きていくことは同じ一つのことである。神とは生そのも
のである」と言い、「生命こそすべてだ。生命は神なのだ。一切は変
動し流転する。そしてこの動きが神である。生命ある限り、神性自覚
の喜びがあるのだ。生命を愛することは、神を愛することである」と
述べている。また夏目漱石は「山でも川でも、僕が崇高と感ずる瞬間
の自然、取りもなおさず神じゃないか。その外にどんな神がある」と
言っている。筆者はこれらの言葉に全く同感し同意する。現代社会に
おける甚だしい精神的道徳的荒廃、生命軽視の風潮の原因の多くは、
とりもなおさず自己の生命の根源を忘却し、自己を産み生かし育む自
己を超えた大いなるものへの畏敬の念を喪失したことによるのではな
かるうか。今こそ正しい普遍的な宗教的知識、正常な宗教的情操を教
育、涵養するべき時ではなからうか。さもなければ邪宗邪教、邪信に取
り憑かれ、マインドコントロールされて自ら破滅するだけでなく社会
に害をもたらす若者が絶えないのではなからうか。

確かに絶対化された特定の神、思想、集団、国家、カリスマへの絶
対的な信仰・憑依は信ずる者には確固たる精神的な支柱を与えるよう
にみえるが、同時に自分は選ばれたという特別な選民意識と優越感を
持たせ、信じない者、他の神や宗派・教派を信じる者への軽蔑と憎悪
と敵対心を呼び起こす。また同一の絶対者を頂く集団内においても信
仰上の感情や意見や解釈の相違によって激しく憎悪敵対するようにな
る。古来継続し絶えることのない宗教紛争もこのことによるのである。
絶対的な教祖宗祖、カリスマによる宗教は絶えず迫害・紛争を続けて
きたのである。さらに特定の教義・信仰の強制は人間の精神の自由を
奪う人権侵害である。特殊な特定の宗教の教育が否定、排除されるの
当然のことである。そこで信仰の強制や対立闘争迫害を生み出さずこ
となく、人々の心に平安と安心と共和の心をもたらし、すべての人々
の心に通底し、しかも迷信や妄信や狂信に墮すことのない普遍的な宗
教、あるいは宗教的信条は何か、探究することにしたのである。

このような問題意識の下に数々の宗教書をひもといてきたが、未だ
心底から納得できるものが見つからない。大半の宗教書は、特に一神
教系の宗教の教説は絶対者神の存在とその正当性の信仰が前提となっ
ており、信じない者あるいは信じられない者にとつては無意味である。
多神教的な宗教においても個人崇拜を基本とする教祖宗祖の宗教にな
るとやはりその教義・教団は絶対化されその信仰を前提として成立し
ている。受け入れられない者にとっては無用の宗教となる。そしてどう
しても批判を許さない独善的排他的な傾向が強くなりがちである。特
定の宗教の教義・教説はどうしても、いわゆる同一の業界内でしか通
用しない業界用語で語られることになり、一般の人々には通用しない
ことになりがちである。宗教研究者や宗教学者の著書論文においても
同様のことが多い。もつとも真理そのものを的確に表現するには言語
には限界があり、直観に頼らざるを得ないこともある。特に宗教的眞
理は宗教的感性を基底とするので、「義なきをもつて義とする」(親鸞)

とか「不立文字」(禪宗)が説かれるように、言語をもって普遍的概念的に解き明かすことが困難なことが多い。宗教的真理はいわゆる理性よりも感性に基づき、概念的な思考や言語よりも、直感や直観によって心情において体験的に把握され、心を打ち心に訴え受け入れられることのほうが多いということができる。ここに宗教研究の難しさがあるのである。

かくて宗教研究においては文献による研究と共に、現地調査によって観・聴き・感じる体験的研究が重要となるのである。そこで特定の宗教の教義教説ではなく、今なお人々の心の中にとんと無意識のうちに生き働いている民間信仰についての著書論文を探索し、仏教やキリスト教、国家神道や本土の新興宗教の影響を受けることが少なく、しかも今なお宗教が人々の生活の中に息づいている沖縄の民間宗教に行き着いたのである。かくして沖縄の民間宗教に関する文献の研究だけでなく現地を訪ね実地に見聞体験することによって、宗教の源泉の探究を行うことにした。先ず沖縄での調査の結果をまとめ、次に考察を加えたいと思う。

本 論

一、御 嶽

沖縄各地を歩き、道や遺跡を尋ねたり、村の食堂や民宿など人々と接するとき、日本本土では味わえない親しみと好意と安心を感じる。道を探ねて現地まで車で案内してもらったこともしばしばである。民宿の夕食では話しが弾み、村の食堂でも当地の人が必ず話しかけてきて仲間のようになり、最後は三線に合わせて唄い踊りお開きになることが多い。高度経済成長政策推進と共に日本本土で失われてしまった心情が今なお息づいているようである。これは沖縄の大抵の人々が今なお神々と共に生きていくことによるのであろうか。

沖縄における民間の宗教活動の中心は御嶽(ウタキ)である。御嶽

は、沖縄各地の神山・森(ムイ)・城(グスク・スク)・御拝(ウガン)・オン・ワーなど沖縄各地にある聖地・霊地の総称である。おそらく琉球王朝が日本本土の影響の下に嶽の字を当てて御嶽と総称したのではないかとされている。沖縄本土、村のあるところどこにでも御嶽がある。御嶽を中心にシマ、後の村が作られ、村の人々の生活が行われている。現代でも各地の御嶽で熱心にウグアン(御願)する人々、御嶽巡りをする人々に出会う。

御嶽に宿る、あるいは降臨する神々は、村を愛護する祖霊神、島立神、島守神、祝福をもたらすニライ・カナイの神、航海守護神などであり、ほとんどすべての血縁共同体としての村にみられるのは祖霊神・村民愛護神の御嶽であり、村民の生活は御嶽の祭りを中心に民主的に平等に行われてきたとみなされている。もともとは先祖の葬所であったところが御嶽とされていることが多いようである。御嶽は山や丘の上の森の中、平地の森林の中、井戸や泉、大きな洞窟の中などにあるものが多い。御嶽には神殿はなく、香炉だけが置いてあったり、簡単な拝殿が造られその中に香炉が置いてあるものもある。御嶽の中に入ってみると、なにもないただの広場であることが多く、ガジュマルの大木や巨岩・石があるものもある。なかには不格好な鳥居があるものもあるが、これは日本政府による国家神道に基づく御嶽再編によって強制的に作られたものようである。すべての御嶽に共通しているのは賽銭箱の全くないことである。もともと神にわずかの金を払って庇護や幸運を買うというさもない取引信仰自体が本来の宗教にはなじまないものである。普天間宮は熊野権現を祀り本土の神社そのままであり受験祈願なども行っているが、巫女に頼んで元来の洞窟の中の御嶽を拝見させてもらったとき、賽銭を上げぬようにきつく禁じられた。本土の本来の神々の居所であった鎮守の森も沖縄の御嶽と同様であったのではなからうか。

御嶽の代表的なものに世界文化遺産にも登録された知念半島にある琉球七御嶽の筆頭とされている斎場御嶽(セーファウタキ)がある。

斎場御嶽は小高い丘の深い森・腰当森（クサテムイ・北風を防ぐ守護森）の中の琉球石灰岩の巨岩の下部がえぐられて庇のようになっていて、二本の鍾乳石が垂れ下がっておりその下に香炉が置かれ神聖な場所イビ（イベ）とされ大庫理といって、ここで王府最高の女神官・聞得大君（キコエノオオキミ）の御新下り（即位式）が行われた。（写真1）

また鍾乳石から滴る水滴を器に受けてその年の豊凶を占ったといわれている。斎場・セーファ（セーパ）のセはセイ（精）、セジ（霊力）あるいは岩石の意で、ファは場である。すなはちすばらしい霊力をもった神の依り代としての巨岩のあるところという意味である。その側の巨岩の寄りかかった三角の裂け目のあるところを入った奥の小平地は三庫理という聖地で（写真2）、

この中に、琉球開闢の女神アマミキヨが最初に来臨しニライ・カナイより五穀をつたえたといわれる神の島「久高島」の遥拝所がある（写真3）。

また斎場御嶽の森の中にナーワンダーと呼ばれる二つの巨岩があり、一つはキキガナーワンダーで男根を表し、他方はキナグナーワンダーで女陰を表し、それぞれの岩の根本には人骨が埋められており、古代の性器崇拜と人骨崇拜を表す祭祀場であったようである（湧上元雄『沖縄民族文化論』

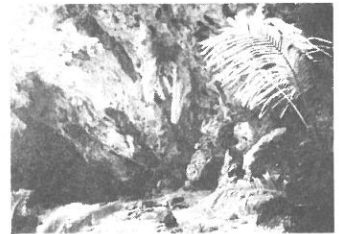


写真1



写真2



写真3

容樹社）。さらに斎場御嶽の右手の深い森の中は風葬の地であったよううで死体を置いた石囲いがいくつもこっている。（写真4）（写真5）



写真4



写真5

斎場御嶽は、東御廻い（アガリウーマイ）といって、琉球王府の重要な御嶽として国王がしばしば巡拝し豊饒と安寧を祈願した。平安時代の朝廷の熊野御幸のようなものであろう。この御嶽は王府の祭祀場となる前は地元の人々の聖地であったと思われる。神殿も社殿・拝殿もなく自然のままにただ一人御嶽や風葬の跡の静寂の中にある。訪れる人もないままにただ一人御嶽や風葬の跡の静寂の中にあらずんでいると、なんとなく霊的な神秘的な雰囲気を感じる。キグナーワンダーなどの遺跡については探したがよくわからず、少ないバスの時間の関係で諦めざるをえなかった。

那覇市の一番高い丘陵、弁ヶ嶽の大小二つの峰にそれぞれ大御嶽（写真6）と小御嶽（写真7）があり、ビンヌタキと呼ばれている。



写真6



写真7

大きい方は久高島への、小さい方は斎場御嶽への琉球国王の遙拝所である。かつては石造の立派な拝所があったが沖繩戦で森林と共に消滅し、現代は大嶽の方にコンクリートの拝所が造られている。今は那覇市民のための御嶽として参拝者が多い。御嶽の中は森林で他になにもない。（写真8）



写真8

御嶽で多いのは岩山や巨岩・巨石である。糸満市白銀堂の御嶽は二つの巨岩である。（写真9）（写真10）



写真9



写真10

海岸の岩山も御嶽であることが多い。（写真11）は伊是名島の岩山で航海の神の依り代と思われる。（写真12・1）は伊平屋島の岩山で、中にクマヤーガマと呼ばれる高さ十メートルほどの大洞窟があり、拝所（ウガン）となっている（写真12・2）。島の人々はこれぞ天の岩戸であるとして、岩戸祭りを行っている。

写真11



写真12・1

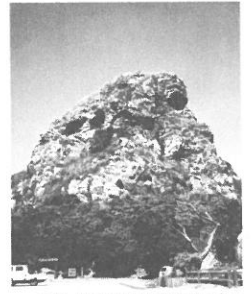


写真12・2



くまや洞窟内拝所

(写真13) は伊江島の伊江タツチューあるいはグスク山と呼ばれる巨大岩山で、麓にはグスク山御嶽があり、伊江島のシンボルでありまた航海の神などとして島民の心の拠り所となっている。頂上の眺望はすばらしいが、沖縄戦では米軍攻撃の標的となり、麓の壕で多数の島民が死亡した。浜比嘉島ではアマミチュー上陸の地といわれる巨岩の集積でできた島が聖地とされ、アマミキヨの墓といわれている、今は塞がれているが風葬の洞窟がある。またシルミチュー霊場と呼ばれる風葬の洞窟も御嶽として祀られている。(写真14) (写真15)



グスク山御嶽(伊江島)

写真13

巨岩が神の依り代として祀られることは日本本土でも各地に数多くあり、古代信仰の特徴である。新宮市の神倉山の巨岩ゴトビキ岩は熊野三山の御神体の岩として今も信仰を集めている。(写真16) 単体の岩や石を神の依り代として祀った御嶽も各地に見られる。日本本土にも磐座・磐境信仰として各地に多い。沖縄では灵石はビジュールと呼ばれ、豊作豊漁、航海安全、子授けなどの神として信仰されている。(写真17・伊江島、写真18・玉城村、写真19・名護市) 灵石・石神信仰については後に詳しく述べる。



写真16

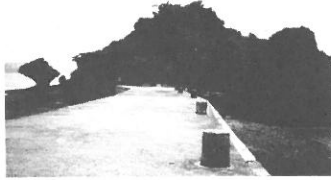


写真14



写真15



写真17



写真18

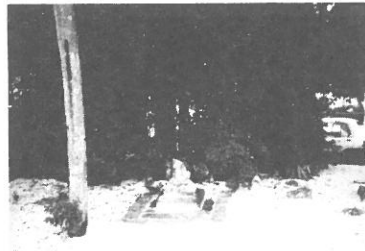


写真19

このように御嶽として崇められている岩山の麓には風葬の洞窟や墓が多い。このことは御嶽の由来を表している。



ヘアの御嶽(黒島)

写真23



御嶽中心部

写真20と



写真24



写真21



御嶽(伊江島)

写真25



写真22



御嶽(霊拝所・波照間島)

写真20-1

琉球石灰岩を石垣状に積んで囲いや門を造った御嶽も各地に見られる。囲いや門の中は広場や林である。(写真20-1・波照間島、その内部・写真20-2)、(写真21・竹富島、バイザーシ御嶽)(写真22・池間島)(写真23・黒島)(写真24・那覇市首里園比屋御嶽)(写真25・伊江島)などである。



写真26



写真27-1



写真27-2

国頭村辺戸にある航海の安全を護る女神の鎮座する安須森(アスムイ)は山森そのものが御嶽である(写真26)、また宮古島島尻沖の大神島は島全体が聖地で、島半分の森は御嶽として今なお立ち入りが禁止されている。森は原始林で植物や小動物の宝庫である。島民は独自の祖神(ウヤガン)の祭祀・神事を行っているが、過疎が進み継続が危ぶまれている。(写真27-1・2)

樹木が神の依り代・霊樹として祀られている御嶽も多い。ガジユマル(ガジマル)はその代表的な樹である。幹や枝から気根を次々と出して根付き大木となる生命力・繁殖力にあやかりたいという願いが込められているのであろう。(写真28)は有名な名護市のヒンプンガジユマルである。



写真28



写真32



写真31



写真29

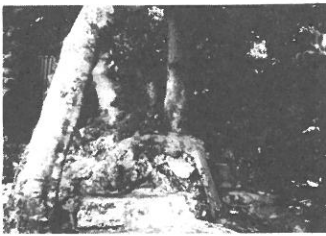


写真33



写真30

(写真29) は那覇市もの、(写真30) は宮古島平良市のもので沖縄の至る所で見られる。

ガジュマル以外にも椰子の一種など様々な樹が祀られている。(写真31・名護市)(写真32・那覇市)(写真33・知念村) などである。

火と水は生命活動の根源である。先祖代々生命を育んできた火と水は「火水の御恩(ヒミミジヌケウン)」といって、霊威(セジ)ある神として崇められてきた。家族の生命を支える竈の火は「火の神(ヒヌカン)」と呼ばれ、家族の守護神としてもっとも崇拜され、家庭生活の節々、冠婚葬祭、年中行事などで先ず第一に御願されてきた。最初は竈そのものが祀られたがやがて三個の石が竈の側に鼎状に置かれ「御三物(ウミチムン)」と呼ばれ礼拝されるようになった。やがて道教の竈信仰と習合して、一家の繁栄・安全・健康などを祈ると共に、旧暦の十二月二十四日と一月四日か五日を上下天日とし家庭内の一年間の出来事や家族とくに主婦の言動を天神に報告するなどの風習が生まれた。竈の神・火の神の主祭者は道教では男の家長であるが、沖縄では年長の女性、母や妻である。後になると主祭者の女性が亡くなると新しい火の神に作り替えたり、分家や女性が結婚する時には実家の火の神の灰を婚家に持参するなどの風習もできた。王府時代になると火の神は家庭の中だけでなく、村々にノロや根神、地頭火の神が置かれ、また御嶽などで特別に祀られるようにもなった。現代の家庭では竈はガスレンジに替わり、三個の石の替わりに陶製の香炉が置かれたりするようになった。筆者が泊まった民宿はすべてシステムキッチンで火の神はなかった。しかし民俗資料館で見ることができた。(写真34・読谷村立歴史民族資料館)



写真34

火の神の御拝（拝所）は各地に見られる。中に三個の石が祀られ、火をたいた跡があるのでそれとわかる。（写真35）は今帰仁村のもので、写真では写っていないが中に三個の石と香炉と火を焚いた跡があり、火の始末と灰を持ち帰るよう注意した張り紙があった。中で紙銭（ウチガビ）などを焚いて祈願するのであろうか。（写真36）は座間味村の拝殿の中の火の神である。（写真37）は宮古島の上比屋山祭祀遺跡の神アシャギの一つの中にあつた火の神を祀つたと思われるものである。



写真35



写真36



写真37

火と共に生命活動の根源である水、及び水を生み出す村の湧泉や井戸（カー）は霊力（セジ）あるものとして崇められ、川山嶽（カーサントキ）として祀られている。高い山の森林が少ない沖縄では特に水は貴重なものであつたであろう。水道の発達した今日でも日照りが続けば水不足で困ることが多い。沖縄各村には先祖来恵みを受けてきた拝泉があり、カー拝み（カーメー）・崎樋川拝み（サチヒージャーウガミ）などといって拝泉巡拝をして水に感謝、川御願（カーウグワン）する行事もある。その際「お水撫で（ウビナディ）」といって額に聖

水を撫でつけて水のセジを受け生命力を高めるのである。カーには村ガー（共同井戸）、ウブカー（産水井泉）、親井（エーガー・村の元の井戸）、精進ガー（ソージガー・禊ぎ用井泉）、祝女ガー（ノロガー・ノロ専用井泉）、樋川ガー（ヒージャーガー・掛樋で水を引いた井泉）、暗川ガー（クラガー・鍾乳洞穴の川）などがある。（写真38）は首里城内の瑞泉で、黒曜石の龍頭から水をおとしているので「龍樋」と呼ばれ、中山第一の名泉といわれている。写真の人々はカーウグワンに来た家族である。（写真39）は那覇市、（写真40）は伊良部島、



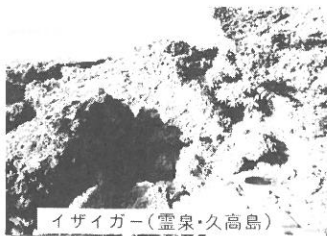
写真39



写真38



写真40



イザイガー(霊泉・久高島)

写真41



写真43



霊井泉(伊是名島)

写真42

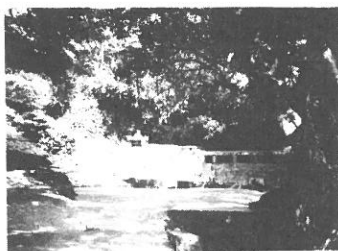


写真44



写真45



写真46

(写真41) は久高島、(写真42) は伊是名島、(写真43) は座間味島、

(写真44) は玉城村の仲村渠樋川(ナカンダカリヒージャー)、(写真45) は同村の浜川御嶽、(写真46) は同村の受水走水(ウチンジュハインジュ)で二つの泉から湧く水で稲が作られ、稲作発祥の地といわれている。(以下次号)

二〇〇一年 十月三十一日受付
二〇〇一年十二月二十五日受理